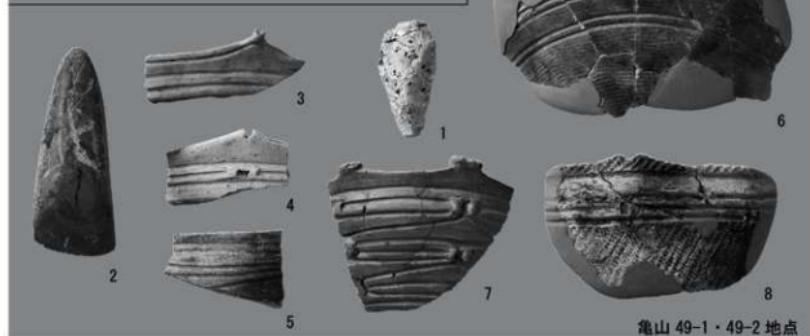




龜山 36-1 地点



龜山 49-1・49-2 地点

写真 29 つがる市教育委員会調査出土遺物（龜山 36-1、龜山 49-1・49-2 地点）

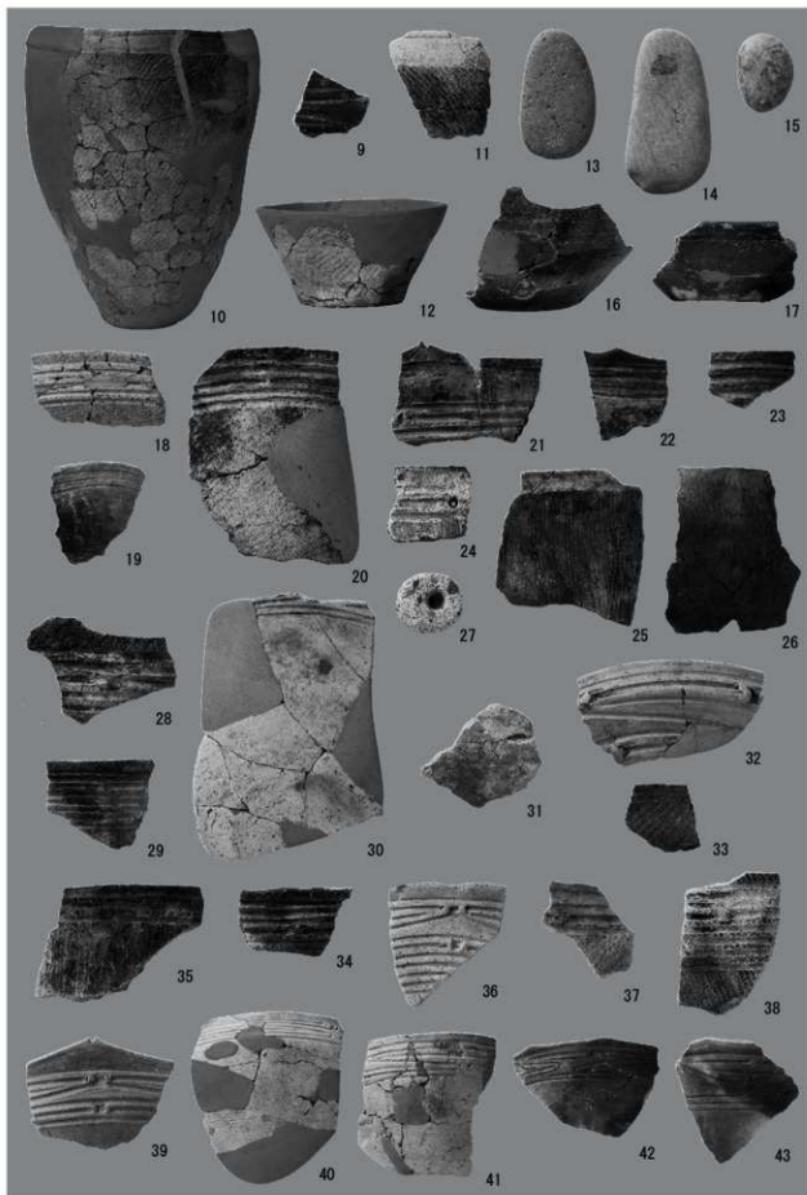


写真 30 つがる市教育委員会調査出土遺物（亀山 49-1・49-2 地点①）



写真31 つがる市教育委員会調査出土遺物（亀山49-1・49-2地点②）

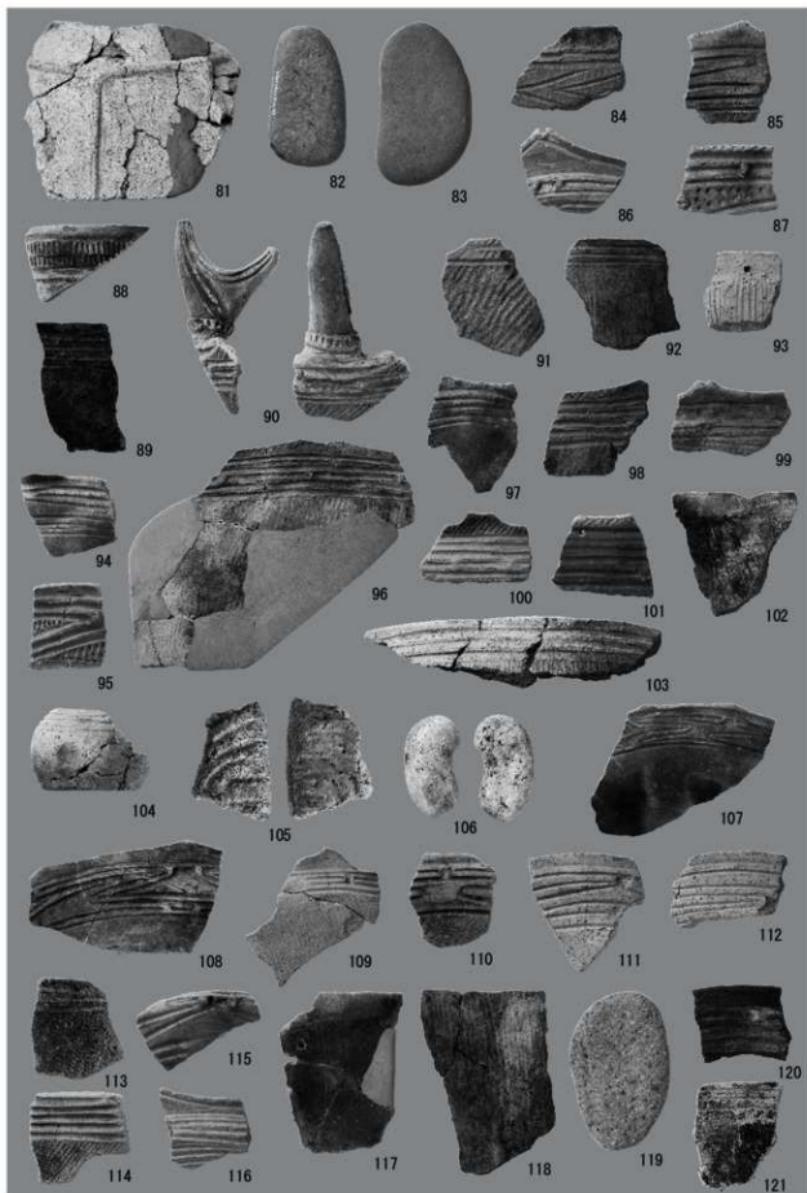


写真 32 つがる市教育委員会調査出土遺物（亀山 49-1・49-2 地点③）

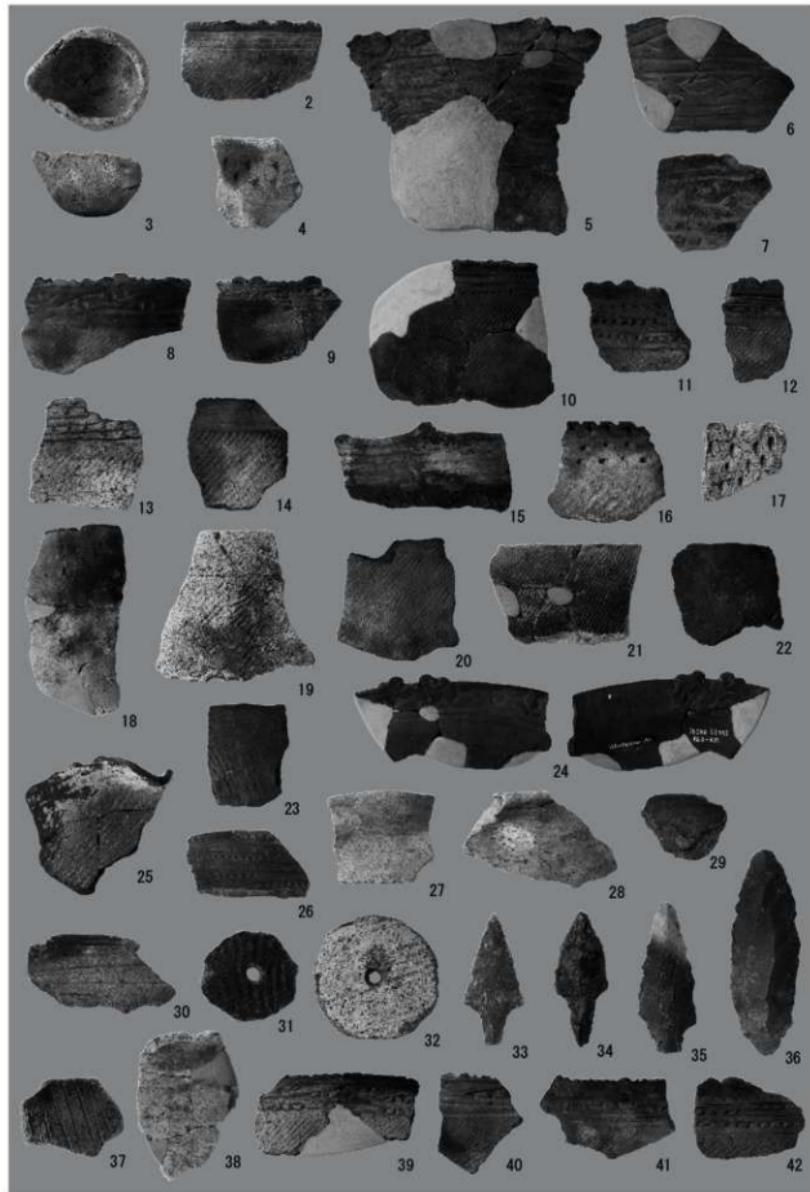


写真 33 つがる市教育委員会調査出土遺物（沢根 83-32 地点）

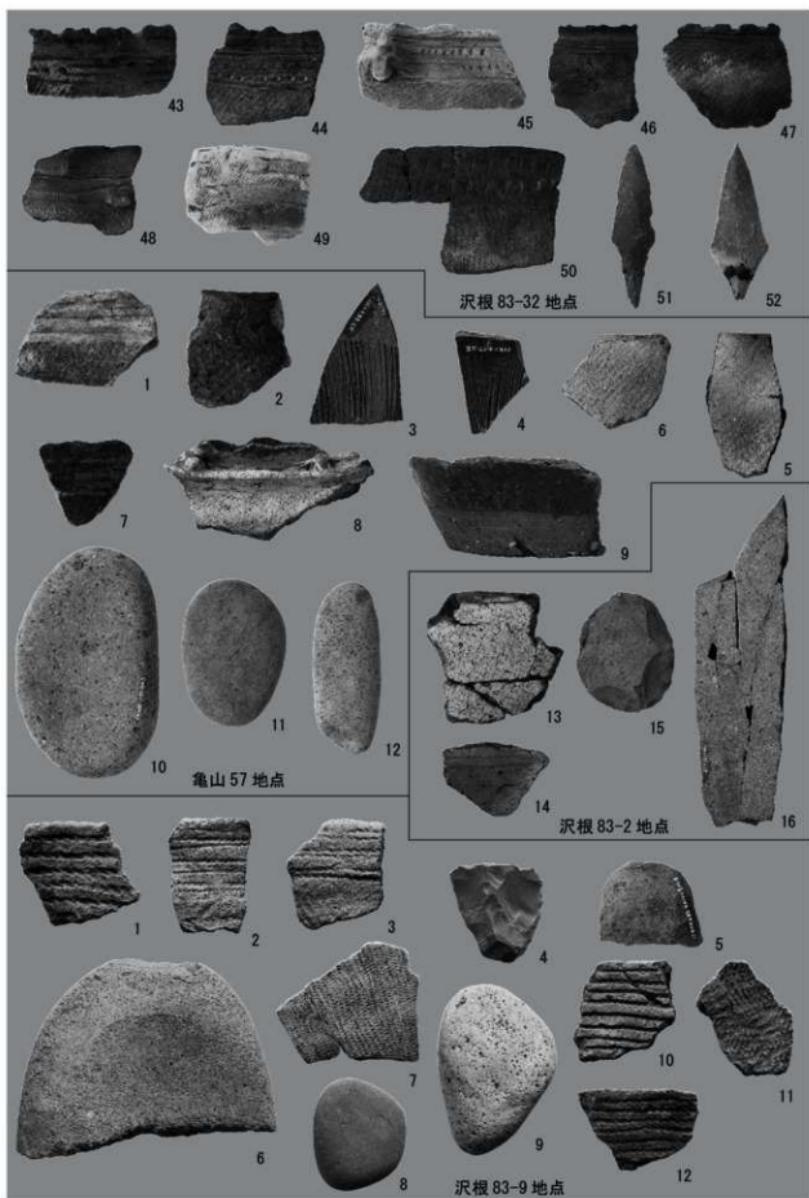


写真34 つがる市教育委員会調査出土遺物（沢根83-32、亀山57、沢根83-2、沢根83-9地点）

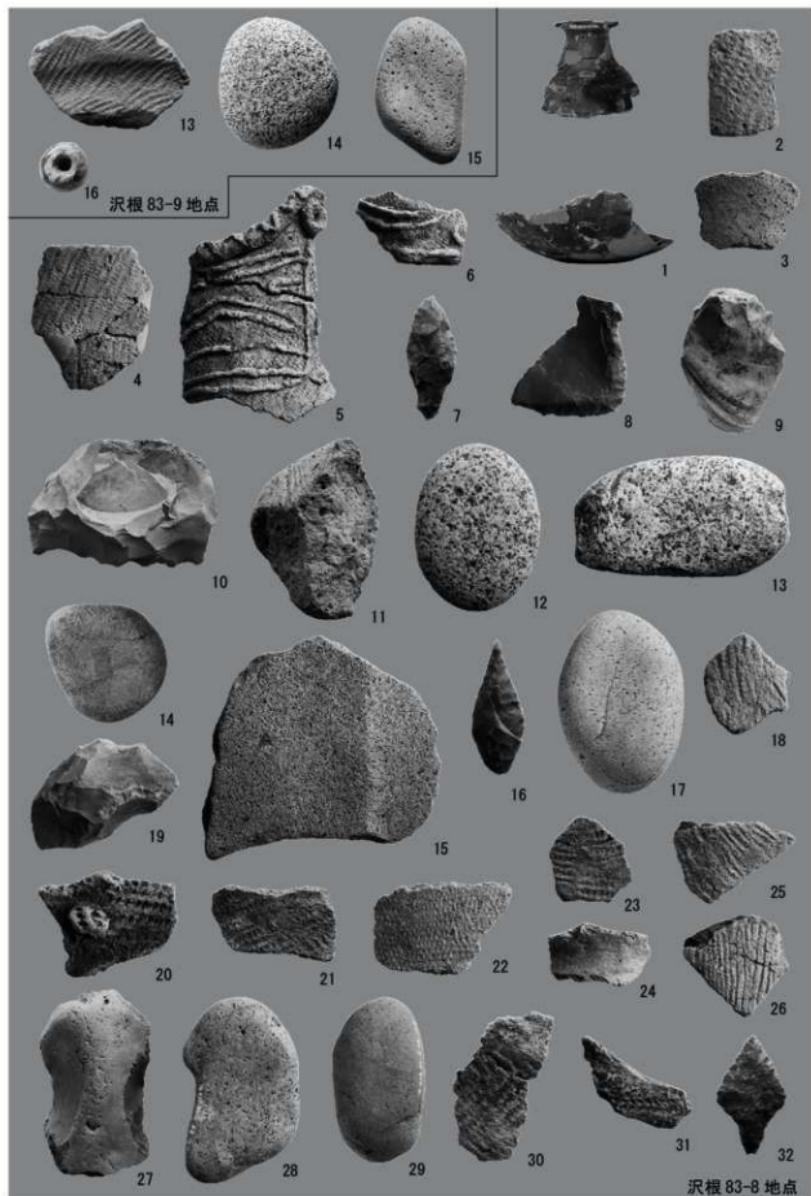


写真 35 つがる市教育委員会調査出土遺物（沢根 83-9、沢根 83-8 地点）



写真 36 つがる市教育委員会調査出土遺物（沢根 83-8、沢根 83-52、沢根 83-51 地点）

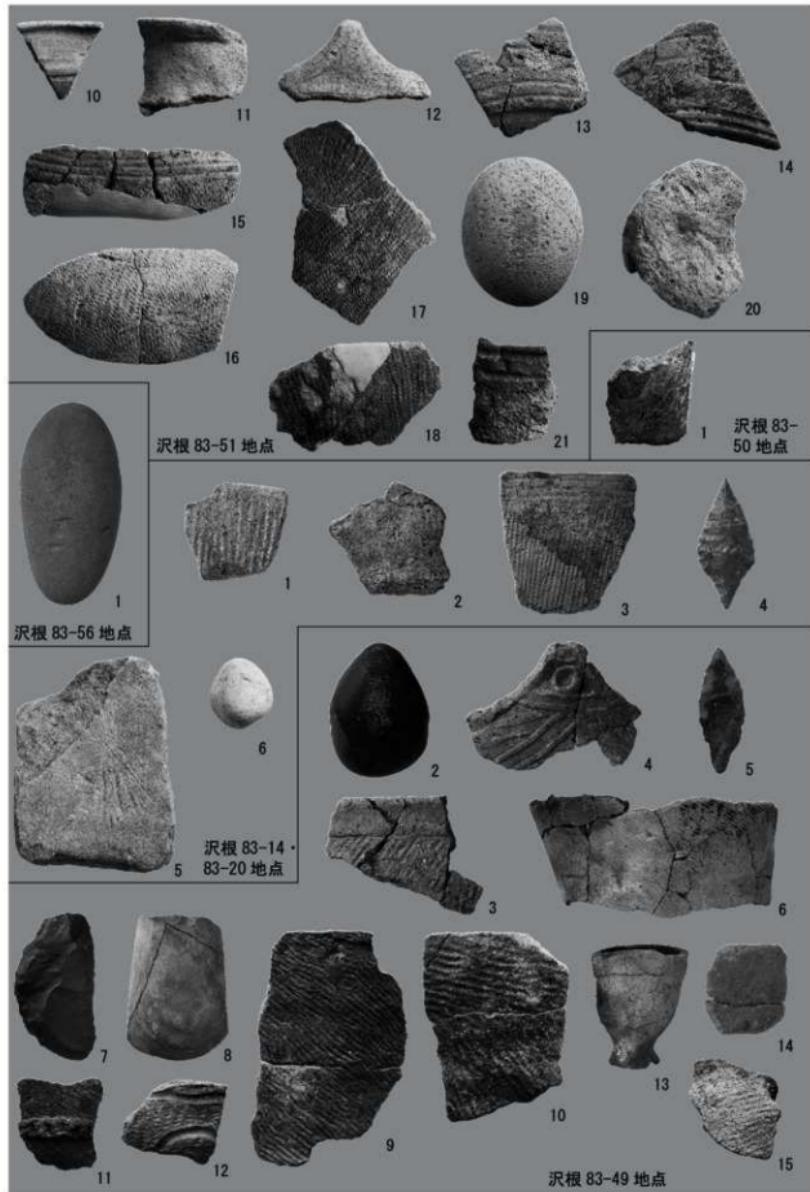


写真 37 つがる市教育委員会調査出土遺物（沢根 83-51、83-50、83-56、83-14・83-20、83-49 地点）

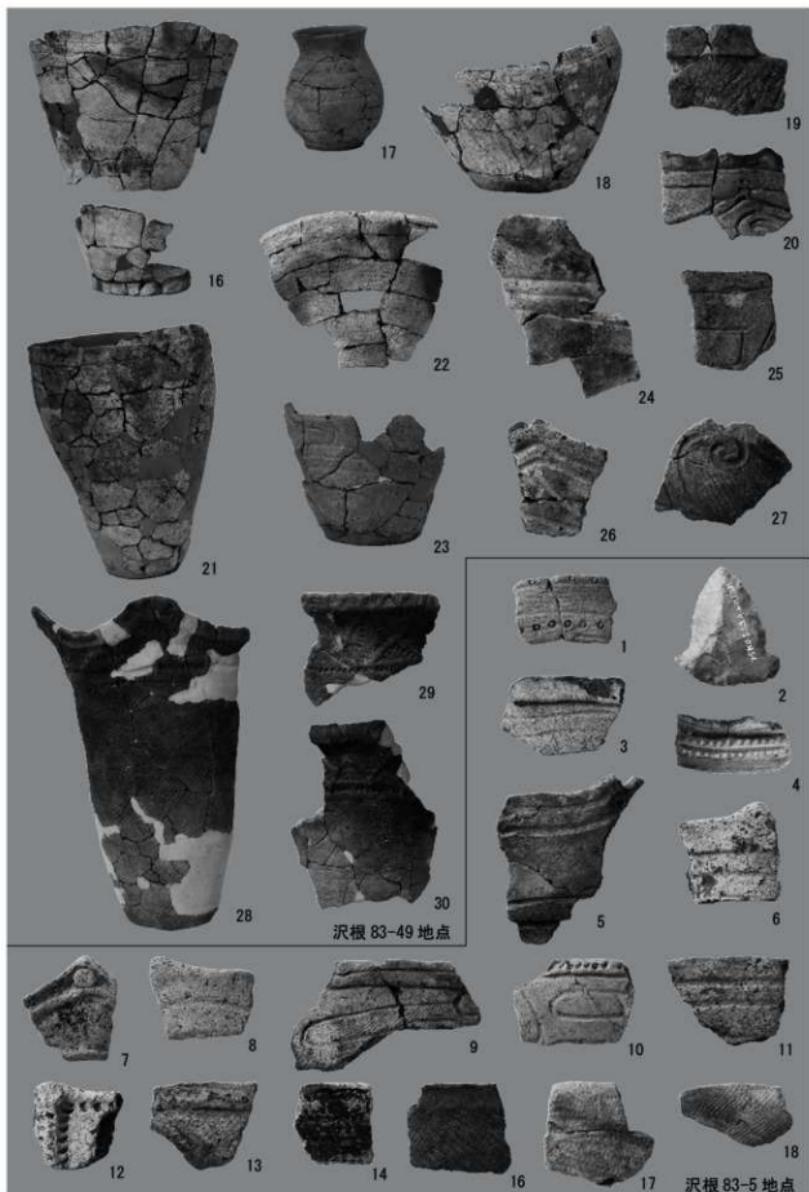


写真 38 つがる市教育委員会調査出土遺物（沢根 83-49、沢根 83-5 地点）



写真 39 つがる市教育委員会調査出土遺物（沢根 83-5 地点）

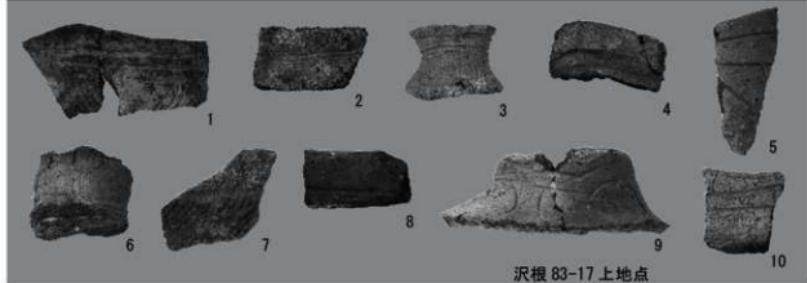
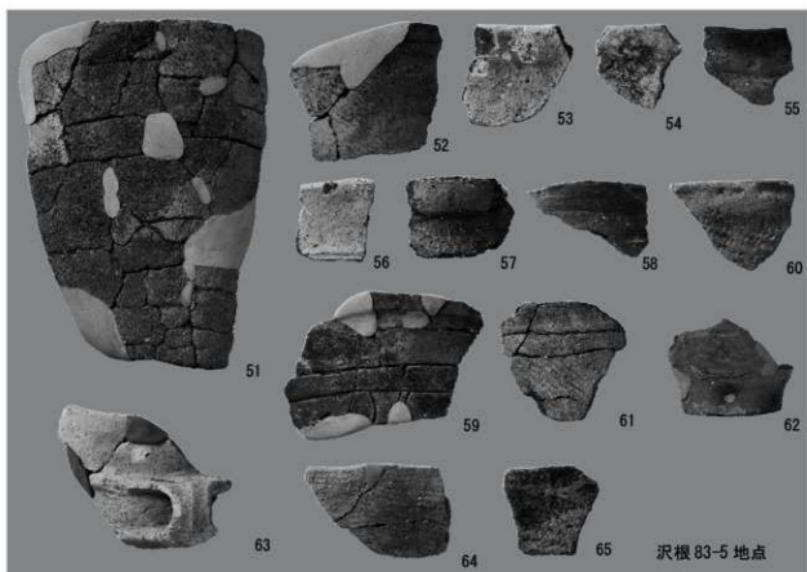


写真 40 つがる市教育委員会調査出土遺物（沢根 83-5、沢根 83-12・83-13、沢根 83-17 上地点）

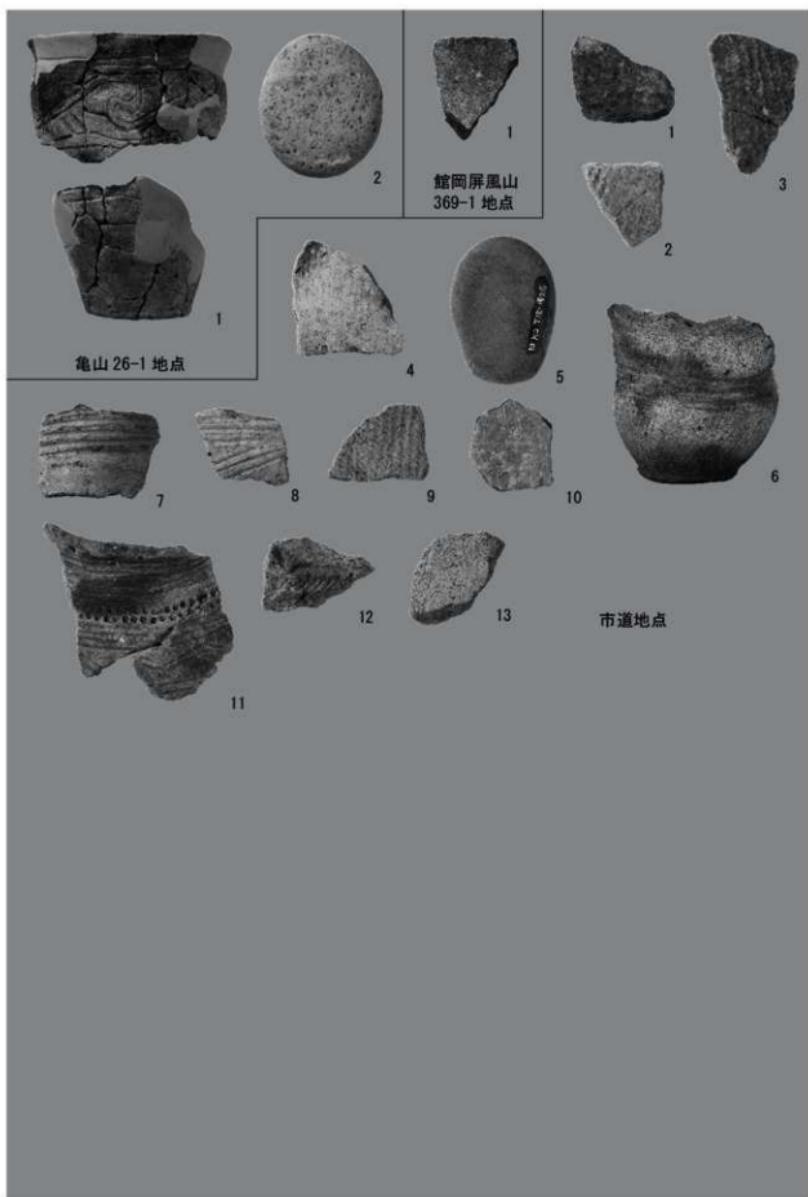


写真 41 つがる市教育委員会調査出土遺物（亀山 26-1、館岡屏風山 369-1、市道地点）

付編 史跡田小屋野貝塚総括

第1節 青森県立郷土館・つがる市教育委員会の調査概要

1. 遺跡の概要

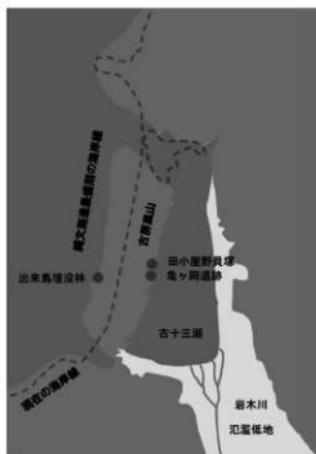
史跡田小屋野貝塚は、縄文時代前期中葉および中期前葉の貝塚を伴う集落遺跡である。遺跡は、日本海沿岸部に南北に連なる屏風山砂丘地帯の中央部東端に位置し、東西に開析する谷に沿って延びる尾根状地形の東端部、標高10~15mほどの台地平坦部から緩斜面上に立地する（図1-1・1-2、図付1）。集落の開始時期である前期中葉は、早期以降の温暖な環境が継続し、遺跡東側の低地には縄文海進によってできた内海「古十三湖」が広がっていたと考えられている（図付2、辻・佐野2015）。

埋蔵文化財包蔵地としては東西1.4km、南北0.4kmの範囲が登録され、そのうち貝層が地表面に広がる南東部分が昭和19年に史跡に指定されている。指定後長らく発掘調査は行われなかつたが、畑地化や土砂採取等による遺跡破壊の進行が懸念されたことを受けて、平成2・3年には青森県立郷土館により史跡の西側隣接地で発掘調査が実施された。この調査により前期中葉頃の堅穴建物跡1軒が検出され、建物跡内からヤマトシジミを主体とする貝層と各種の動物遺存体、骨角器、ベンケイガイ製の貝輪等が出土した（青森県立郷土館1995）。青森県立郷土館による調査以降も史跡周辺では宅地化や農地化、土砂採取が進行し、さらには上下水道敷設計画も生じたことから、平成20・21・23~27年に史跡内外の確認調査がつがる市教育委員会により実施された（図付3）。その結果、史跡内およびその周辺域では前期中葉～中期末葉にかけての堅穴建物跡、埋葬人骨の出土した土坑墓、フラスコ状土坑、盛土遺構などの各種の遺構や地点貝塚が検出され、調査成果は『田小屋野貝塚総括報告書』（つがる市教育委員会2016）にまとめられている。田小屋野貝塚は縄文時代前期から中期にかけて貝塚を伴う集落遺跡であり、その変遷や構造の解明、食生活の復元等において北海道・北東北では重要な遺跡として位置付けられることから、遺跡のさらなる万全の保護を目的として平成29年度に既指定地西側が追加指定を受けた。

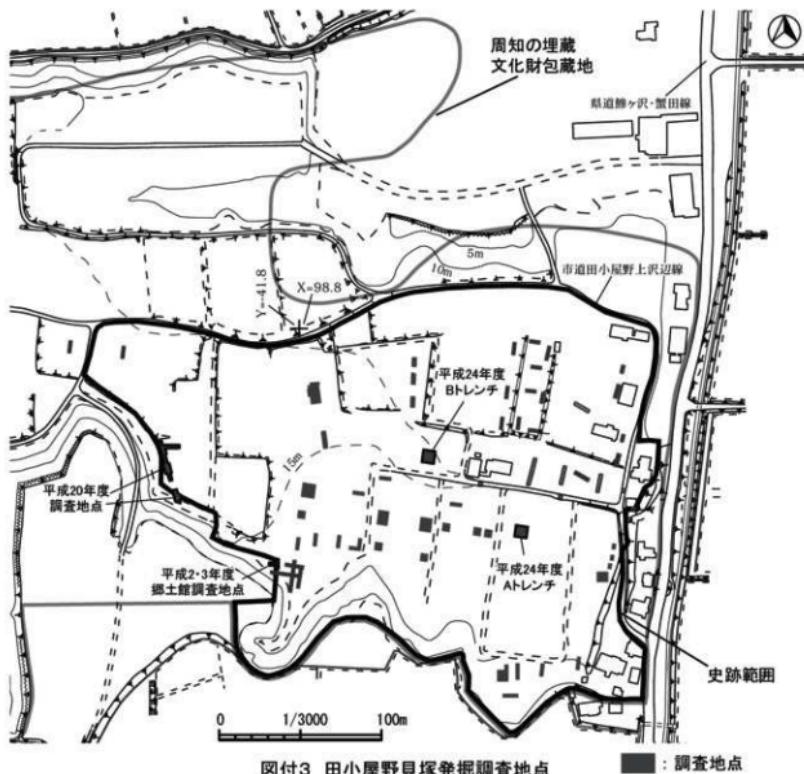
これまでの調査地点は多数にのぼるが、その中から遺跡の性格をよく示す調査成果のあった地点に限定して調査概要を再報告するとともに、上記報告書で触れることのできなかった遺跡の重要性について総括をおこなう。



図付1 田小屋野貝塚遠景（南東から）



図付2 つがる市周辺の縄文海進
(辻・佐野2015)



図付3 田小屋野貝塚発掘調査地点

■：調査地点

2. 調査成果の概要

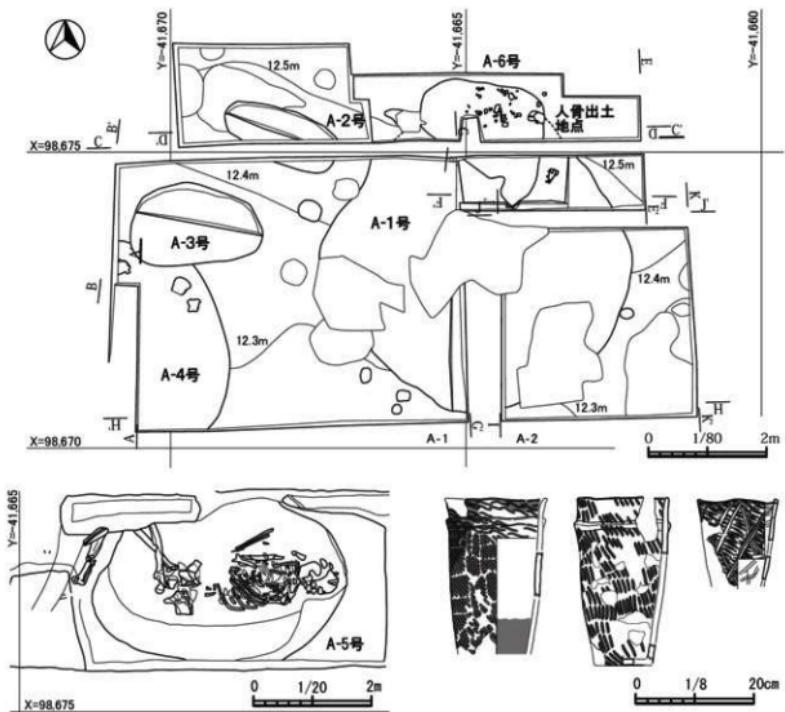
【史跡東側の埋葬人骨出土地点(平成 24 年度 A トレンチ)・図付 4】

つがる市教育委員会により、史跡東側の標高 12.5~13m の南向き緩斜面地、約 50 m²を対象に調査が実施された。検出遺構は縄文時代前期中葉の堅穴建物跡 3 軒、土坑墓 3 基である。土坑墓のうち A-5 号は A-1・A-6 号堅穴建物跡と重複し、円筒下層 b 式期のヤマトシジミを主体とする貝層下から埋葬人骨が検出された。A-5 号の長軸は東西方向であり、人骨は東頭位で右側臥屈葬の状態である。死亡年齢が壮年期後半から熟年期の成人女性と推定され、骨盤の特徴から妊娠・出産歴のあった可能性が形質人類学的分析により示されている。

A トレンチの遺構および遺物包含層からは、前期中葉の円筒下層 a・b 式土器や石鏃・石匙・半円状扁平打製石器・磨石・砥石等が出土した。

【史跡中央部の堅穴建物跡内貝塚出土地点(平成 24 年度 B トレンチ)・図付 5】

つがる市教育委員会により、ヤマトシジミの地表散布が確認された史跡中央部の標高 14~15m の北向き緩斜面地、約 150 m²を対象に調査が実施された。検出遺構は堅穴建物跡 5 軒、溝跡 1 条、土坑 1



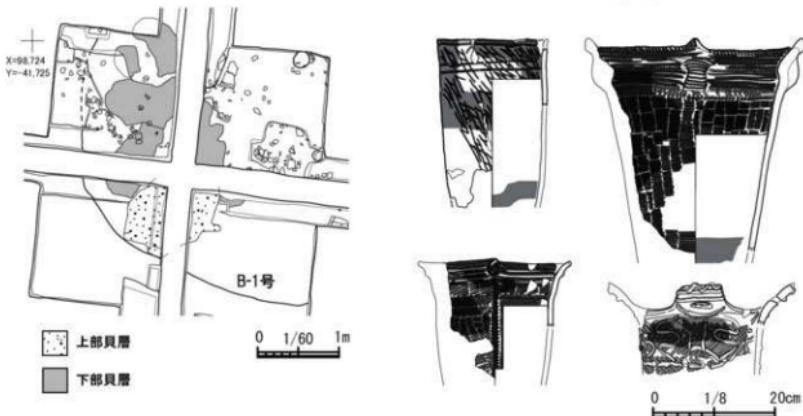
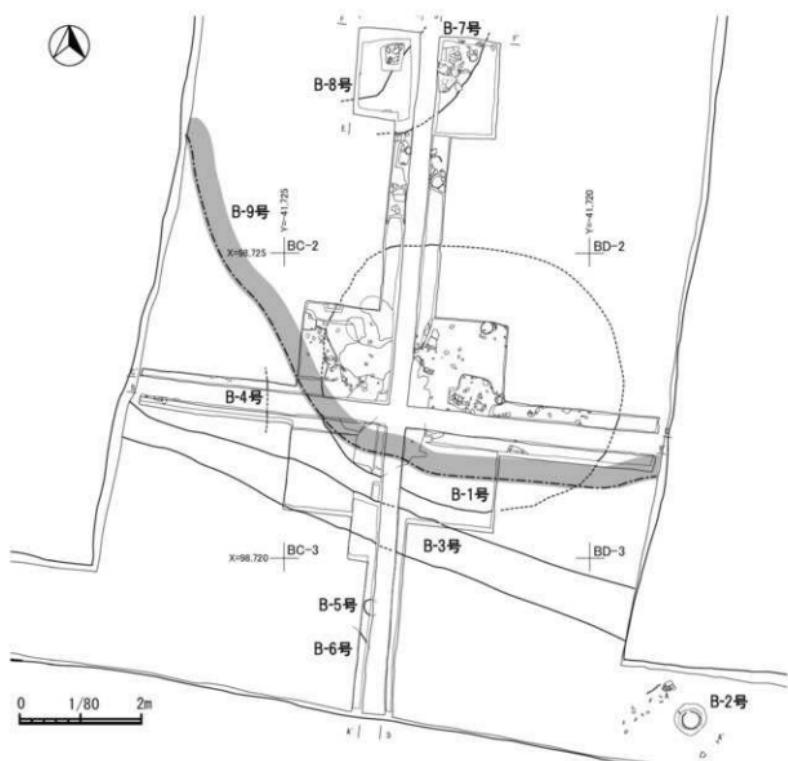
図付4 平成24年度調査 Aトレンチ検出遺構および出土遺物

基、埋設土器1基、盛土遺構1か所であり、溝跡は平安時代、その他は縄文時代前期中葉～中期中葉にかけての遺構と考えられる。前期中葉以前に位置づけられるB-1号は平面形状がほぼ円形を呈する堅穴建物跡であり、直径が約5mに達する。堆積土には、間層を挟んで上下2層の貝層が確認された。いずれもヤマトシジミを主体とし、上部貝層には円筒下層d2～円筒上層a式の土器片が、下部貝層には円筒下層b式の土器が伴う。下部貝層については土壤サンプルの水洗選別が実施され、ヤマトシジミの他にフナ属、サケ科の動物遺存体が検出されている。

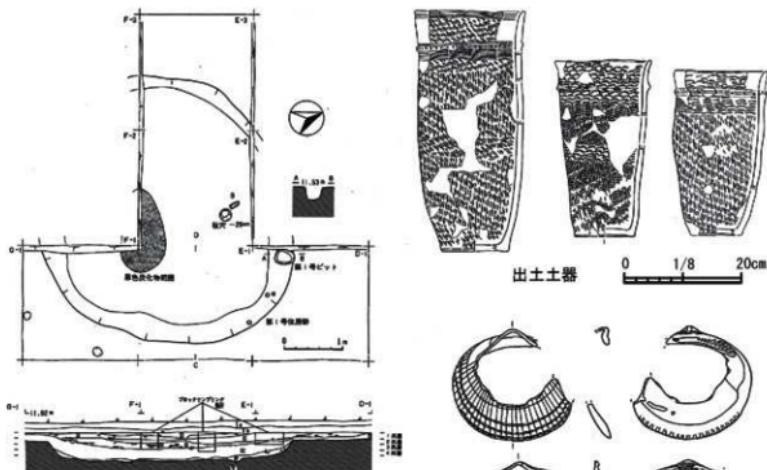
B-2号は、口縁を掘方底面に設置した逆位の埋設土器である。構築年代は、土器型式から円筒下層d2式期と考えられる。

B-9号は、B-1・B-7・B-8号堅穴建物跡と重複し、これらより新しい時期の盛土遺構である。炭化物層とロームの二次廃棄層が互層をなして堆積しており、出土遺物の特徴から前期末葉～中期中葉頃にかけて盛土の堆積が継続したと考えられる。炭化物層(III層)からは、クリ・オニグルミの種実遺体およびコナラ節・クリ・サクランボの炭化材が出土している。

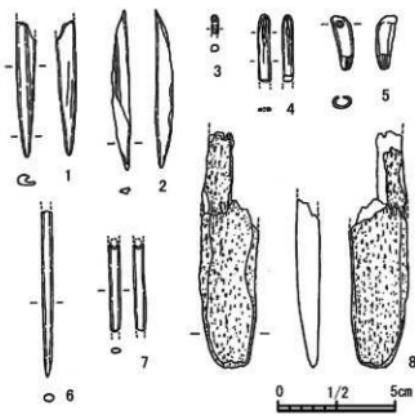
Bトレンチの遺構・遺物包含層から出土した土器の大半は前期末葉から中期初頭の円筒下層d1～円筒上層a式であり、その他前期中葉の円筒下層b式、中期中葉の円筒上層e式がわずかに出土した。石器ではB-1号から石鏟・磨石等が出土した。



図付5 平成24年度調査 Bトレンチ検出遺構および出土遺物



第1号竪穴住居跡



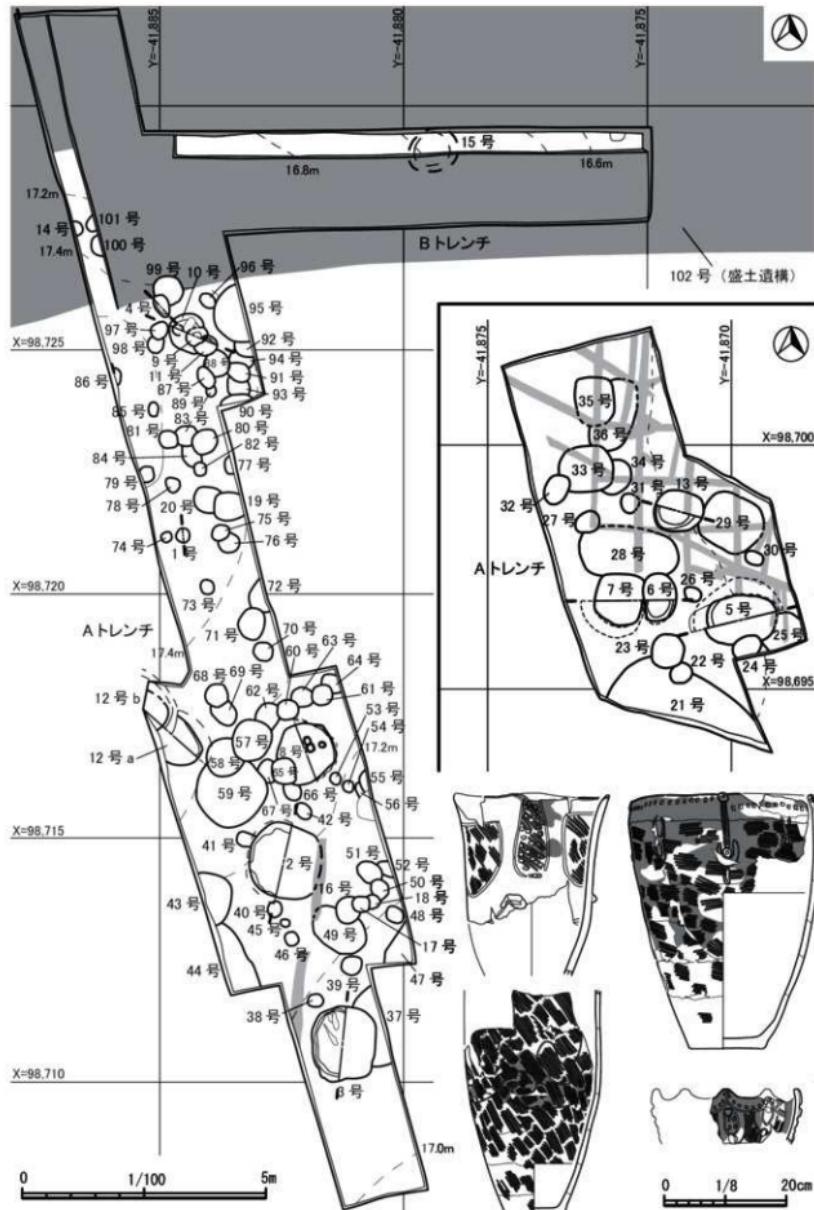
骨角牙器(刺突具・釣針・骨針・骨ヘラ・装身具)

ベンケイ貝製腕輪

図付6 平成2・3年度 青森県立郷土館調査地点検出遺構および出土遺物

【史跡南西端部の竪穴建物跡内貝層出土地点(平成2・3年度青森県立郷土館調査地点)・図付6】

青森県立郷土館により、多量の貝殻や土器の表面散布が確認された史跡南西端部の標高13mほどの南向き緩斜面地で調査が実施された。なお、県立郷土館による調査時には旧史跡指定地の外であり、調査地点の南西際まで土砂採取が及んでいた。検出遺構は竪穴建物跡1軒であり、平面形は北東—南西を長軸とする楕円形を呈し、長軸約5m、短軸約4.5mの規模を有する。床面直上の出土遺物から、建物跡の年代は前期中葉頃の深郷田式→円筒下層a式期と考えられる。



図付 7 平成 20 年度調査 A・B 挖溝検出遺構および出土遺物

この第1号竪穴建物跡の堆積土上部（第II層）はヤマトシジミを主体とする混土貝層であり、個体復元可能な土器や石器とともに、動物遺存体、骨角器、貝製品が出土した。この混土貝層から出土した土器は円筒下層b1式が主体であり、貝層も同時期に堆積したと考えられる。

建物跡から出土した土器は深郷田式～円筒下層b1式が主体であるが、前期末葉円筒下層d1式や中期（円筒上層a・d・e式、榎林式、最花式）もある。石器は石鏃、石槍、石匙、磨製石斧、半円状偏平打製石器、抉入扁平磨製石器、敲磨器等が出土した。動物遺存体では、貝類、魚類、両生類、は虫類、鳥類、哺乳類が土壤サンプルの水洗選別により確認された。貝類はヤマトシジミが全体量の9割以上を占め、イシガイがこれに次ぐ。魚類はコイ科とサバ属が最も多く、ニシン科・サケ属・ブリ属・ウミタナゴ科・ソウダカツオ属等もみられた。鳥類はガン・カモ類が最多で、オオハクチョウ・コガモ・カモ類等が含まれる。哺乳類はトド・アシカ・イルカ類・クジラ類などの海獣類が多く、陸獣骨はノウサギがやや多い。縄文時代の貝塚に一般的なシカ・イノシシは出土していない。

骨角器は刺突具、釣針、骨針、骨匕、骨べら、牙製垂飾品など14点が出土した。陸獣骨、鳥骨、鯨骨等を素材としており、牙製垂飾品はイルカの遊離歯に穿孔を加えている。この他、ベンケイガイを素材とし、打ち欠きにより殻頂部が穿孔された貝輪が約60点出土した。破損品が多く、打ち欠いた縁辺も研磨されていないことから、全て加工途中で破損した未成品と考えられる。

【史跡西部地点(平成20年度A・Bトレーナー)・図付7】

つがる市教育委員会による調査時は旧史跡指定地の西側隣接地にあたり、遺跡の内容確認を目的として標高17～18mの北向き緩斜面地、約150m²が調査された。A・Bトレーナーの検出遺構は総数103基であり、土坑、フラスコ状土坑、ピットが多くを占めるが、埋設土器2基、竪穴建物跡と考えられる遺構1基、盛土遺構1か所も確認された。精査した遺構数は16基だが、堆積土の状況や出土遺物から、そのほとんどが中期末葉の大木10式並行期と考えられる。調査区北端部で検出された盛土遺構は、北向きの緩斜面地に対し土器や石器とともにローム混入土が廃棄されて形成され、他の遺構同様、中期末葉の年代が考えられる。

遺物は土器や石器が出土したが、土器のほとんどは中期末葉大木10式並行期であり、円筒上層式土器や中期後葉の土器片もわずかにみられた。

3. 調査成果のまとめ

これまでの調査の結果、史跡内には広範囲に遺構・遺物が分布し、その保存状態も良好であることが確認された。田小屋野貝塚の存続期間は縄文時代前期中葉～中期末葉において、前期中葉頃と中期初頭頃の2時期に形成された地点貝塚を伴う集落遺跡である。史跡南東部では縄文時代前期中葉から末葉にかけての土坑墓や多数の竪穴建物跡が検出されたことから当時の居住域と考えられる。その後、前期末葉から中期中葉に居住域が北側へと移動している。中期後葉から末葉になると、史跡西側に土坑・フラスコ状土坑・ピットを主体とする遺構群が広がり、竪穴建物跡も少数伴うことから、この時期には集落の中心が西方に移動し、その後終焉を迎えたと考えられる。

本貝塚は汽水域が広がる古十三湖に面し、周辺にはオニグルミやクリなどの有用植物を含む落葉広葉樹が広がる環境下にあった。動植物遺存体の分析や出土人骨の炭素・窒素同位体分析から、田小屋野貝塚に暮らす人々はシカ・イノシシなどの中型獣狩猟に頼らず、主に堅果類や海生哺乳類を摂取して暮らしていたことが判明した。

また、土器・石器のみならず各種の骨角器やベンケイガイ製の貝輪を製作しており、集落における人々の暮らしぶりが具体的に明らかとなった。

第2節 田小屋野貝塚の重要性

齊藤慶史（青森県教育庁文化財保護課）

はじめに

田小屋野貝塚は、青森県つがる市木造館岡字田小屋野に所在する縄文時代前期から中期にかけての遺跡である。本遺跡は、亀ヶ岡遺跡の北方約200mの舌状台地上に立地しており、貝塚の他に竪穴建物跡、貯蔵穴、土坑墓、盛土が検出されている。本節は、『田小屋野貝塚総括報告書』(つがる市教育委員会 2016) でふれられなかった本遺跡の重要性について、地域的な枠組みを広く俯瞰的に捉え、遺跡の歴史的・学術的価値の観点から総括をおこなうものである。

1. 縄文時代貝塚研究史上の重要な遺跡

明治時代以降、各地の研究者が田小屋野貝塚を訪れ、発掘調査を行っている。明治29年に佐藤傳蔵は田小屋野貝塚の調査を行い、ローム層中から大量の土器や石器が出土したことを記載している(佐藤 1896)。報文では、隣接する亀ヶ岡遺跡との対照的な方針に注目し、特に遺跡の年代については、亀ヶ岡遺跡よりも古い時期のものと推測し、ローム層が洪積世の年代となることから、出土した土器や石器が洪積世末に遡る可能性に言及している。ただ、ヨーロッパで当時発見されていた洪積世人類遺跡では土器や磨製石斧が伴わないことなど、出土遺物の内容に隔たりが大きく、国内でも同様の土層状況を示す遺跡が乏しいことから、「洪積期の遺跡と断言できるものではない」とも述べている。このローム層とは平成24年度Bトレーンチ周辺で検出されていた縄文時代中期の盛土遺構をさすものと推察されるが、亀ヶ岡遺跡と対比する形で、遺跡形成過程にも注意が払われていた点は注目される。

大正から昭和初期にかけて、山内清男による縄文土器の型式編年研究が開始され、基準資料の整備が進められていく。五所川原市オセドウ遺跡や八戸市一王寺遺跡など、本県の貝塚もこうした研究の舞台となり、田小屋野貝塚では、大正14年に山内清男が踏査を行い、昭和3年には、中谷治宇二郎が発掘調査を実施している。それぞれの調査報告には遺跡から円筒土器が出土したことが記載されているが、貝塚や遺構の内容にはふれられていない(山内 1929、中谷 1929、清野 1969)。これらの調査は田小屋野貝塚に近在する五所川原市オセドウ遺跡での人骨発見に端を発する形質人類学者の調査動向との関係性がうかがえ、当時の貝塚調査で人骨資料の獲得が主たる目的となっていた様子がうかがえる。こうした一連の調査研究成果と地域の著名な遺跡という点が評価され、昭和19年には隣接する亀ヶ岡遺跡とともに史跡指定を受けている。

その後、平成2・3年には青森県立郷土館がヤマトシジミの貝塚を伴う竪穴建物跡の調査を行い、ベンケイガイ製の貝輪や北海道産黒耀石、クジラの骨などが出土した。縄文時代前期の津軽地方の狩猟・漁撈・採集のあり方とともに津軽海峡を越えた交流の様相が明らかとなった。また、平成20~27年にかけてつがる市教育委員会が指定地内とその周辺を対象に断続的に確認調査を行い、縄文時代前期中葉から中期末葉にかけての遺構の変遷を把握するに至った。

このように、100年以上にわたる長い調査研究の歴史をもち、多くの先駆者が貝塚研究上の諸課題の解明に取り組む契機をなした本遺跡は、地域の考古学史を考究する上でも価値の高い遺跡といえる。

2. 資源利用の実態を伝える遺跡

貝塚からは動物の骨や貝を加工した骨角貝製品、狩猟や漁撈・採集を通じて獲得された哺乳類・鳥類・魚類の骨、貝殻等が豊富に出土するが、いざれも当時の生業や資源利用の実態を明らかにする上で欠くことのできない情報源である。田小屋野貝塚には、ヤマトシジミを主体とする縄文時代前期中葉と中期初頭の2時期の貝塚が検出されており、青森県立郷土館とつがる市教育委員会の発掘調査から、前期中葉の貝層に含まれる動物遺存体の組成が明らかにされている(青森県立郷土館 1995、つが

る市教育委員会 2016)。

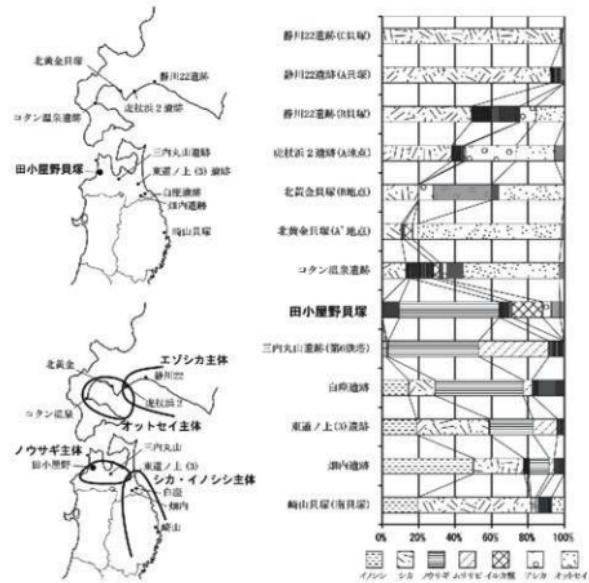
前期中葉の貝塚から出土した動物遺存体は、大きくわけて貝類・魚類・鳥類・哺乳類で構成される。貝類は汽水性のヤマトシジミが9割以上を占め、淡水性のイシガイがこれに次ぐ。淡水性のオオタニシ・マルタニシ・カラスガイも少量みられ、鹹水性のハマグリ・サルボウ類・マガキなども破片の状態で微量確認されている。全体としては汽水性のヤマトシジミが圧倒的に多く、それらは小河川の河口部か汽水に入る沼で採集されたものと推測される。

魚類はコイ科とサバ属が最も多く、ニシン科・スズキ属・サケ属・ブリ属・ウミタナゴ科・ソウダガツオ属も普通にみられる。淡水～汽水性のコイ科と外洋性表層回遊魚のサバ属・ニシン科・ブリ属・ソウダガツオ属が大半を占め、これに若干の沿岸性魚類であるスズキ属・ウミタナゴ科と遡河性のサケ属が加わる構成である。この中で大型の個体としてはスズキ属やサケ属、一部のコイ科などがあり、特にスズキ属とサケ属は中～大型個体によって占められる。また、冷水系の魚種として、サケ属・マダラ・ニシンが含まれるが、基本的には暖流系の魚種で占められている。これについては、貝塚形成時における対馬暖流の卓越した海況を反映したものと考えられる(小泉 1987)。

鳥類はガン・カモ類が最も多く、アホウドリ・ハクチョウ・カツオトリなどもみられる。アホウドリは夏季に飛来した個体を、ハクチョウやカモ類は冬季に越冬のため南下した個体を捕らえたものと考えられる。両種の生態的特徴から、夏・夏・冬の両季節に鳥獣が行われていた様子がうかがえ、魚類の季節性とあわせると年間通じた生業活動の痕跡をみることができる。

哺乳類はノウサギが最も多く、クジラやイルカ、トド、アシカなどの海獣類も目立つ。大型陸獣はわずかにカモシカが確認されたのみで、縄文時代の貝塚から多く出土するシカ・イノシシは出土していない。青森県内の同時

期の貝塚と比較すると、八戸市から小川原湖周辺の太平洋沿岸地域には、シカやイノシシが出土歴骨の半数以上を占める貝塚が多くみられ、日本海側と太平洋側で対照的なあり方が示されている(齊藤 2012)。ノウサギが多い点に関しては、三内丸山遺跡にも同様の傾向がみられるが、海獣類の比率の面においては、三内丸山遺跡と異なり、田小屋野貝塚でやや多くなっている。海獣類については、伊達市北黄金貝塚や八雲町コタン温泉遺跡など、北海道南部の貝塚でオットセイが半数以上を占める遺跡が存在するが、田小屋野貝塚では



図付 8 東北地方北部から北海道南部の獸骨組成

陸獣類の比率が半数以上となり、大きく様相が異なる。また、本州日本海側の同時期の貝塚と比較すると、大型陸獣の少ない遺跡は北陸地方から青森県西部にかけて連続しており、多雪地域の特徴との指摘もなされている（長谷川 2006）。一定程度地理的な連続性の中で漸移的に比率が変動する傾向があり、広く地域的な傾向を押さえた中では、それぞれの遺跡において特有の構成をみることができる（図付 8）。

この他に遺跡内からはオニグルミやクリなどの炭化種実が出土しており、コナラ節やクリなどの炭化材も検出されている。これらは、食料として利用された堅果類や燃焼材・建築材として利用された樹種の内容を示すとともに、集落の周辺に落葉広葉樹を主体とする森林が広がっていたことを示すものである。また、植物質食料の評価をめぐっては、出土人骨の炭素・窒素同位体分析結果も重要である。A-5 号遺構から出土した壯年期後半から熟年期と推定される女性人骨の分析結果によると、生前の食生活は魚類とともに堅果類やイモ類などの C₃ 植物をかなりの割合で摂取するものであったと推測されている。

このように、田小屋野貝塚から出土した多種多様な動植物遺存体は、本州北部に展開した多様な資源環境下で、利用可能な食料資源を巧みに組み合わせていた縄文時代の生業の特徴を具体的に示すものである。また、縄文時代前期中葉と中期初頭の貝塚から出土した動植物遺存体の比較分析を行うことで、縄文海進最盛期以後の古十三湖に生じた環境変動に対して、人々がどのように適応していくのかが具体的に把握できる遺跡といえる。

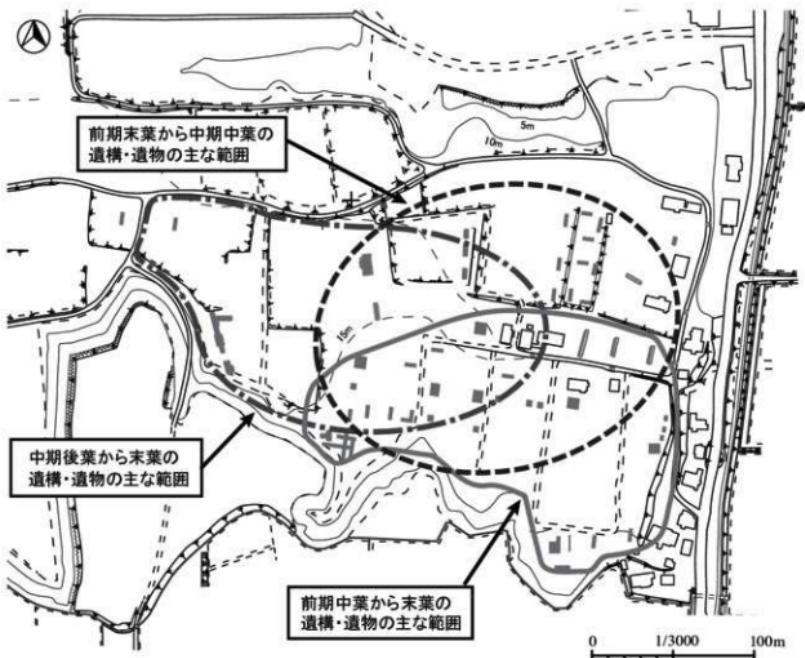
3. 日本海側に立地する希少な貝塚集落

出土遺物の内容と遺構の時期から、田小屋野貝塚では前期中葉から中期末葉に至るまで、約 1,700 年間にわたる居住の痕跡が認められる。遺構は東西に細長く延びる丘陵のほぼ全域に広がり、つがる市教育委員会が実施した内容確認調査から東西 350m、南北 200m の範囲に及ぶことが明らかとなつた。貝塚の他に 22 棟に及ぶ竪穴建物跡、貯蔵穴や盛土、土坑墓等がみられ、居住・貯蔵・廃棄・埋葬といった集落の構成要素が確認されている。

貝塚はいわゆる地点貝塚で、廃絶後の竪穴建物内部に貝層が堆積したものである。平成 24 年度調査の B-1 号遺構では、下層から前期中葉、上層から中期初頭の複数時期にわたる貝層が重層して検出されている。縄文時代前期から中期にかけての生活の様子を示す多種多様な遺物が出土しており、特に貝塚からは骨角貝製品と動物遺存体が良好な状態で検出されている。中でも約 60 点におよぶベンケイガイ製貝輪の破片は、製作残滓や加工途中での失敗品と考えられるもので、完成品は 1 点も確認されていない。このため、本遺跡は貝輪生産に関わる遺跡であり、直接的な素材入手が困難な内陸や北海道の集落へと完成品を供給していた様子が推測されている（福田 1995）。また、本遺跡出土の黒耀石には在地の出来島産黒耀石の他に北海道（豊泉・赤井川・白滝）産黒耀石が含まれており、津軽海峡を越えた交流・交易の存在が明らかとなっている。これらの要素は、物資の流通拠点ともなった本集落の性格の一端を示すものとして重要である。

土坑墓からは人骨が出土しており、葬制や社会に接近する情報も得られている。平成 24 年度調査の A-5 号遺構出土人骨については、形質鑑定や炭素窒素同位体比分析による食性解析が行われ、集落に暮らした人々の身体的特徴や食生態が復元されている。

また、これまでの内容確認調査から集落中心部の時期変遷の概略が明らかにされている。前期中葉に遺跡南側において居住がはじまり、前期末葉まで中心的な居住空間として維持される。その後、前期末葉から中期中葉にかけて北側へと居住域は移動し、中期中葉から末葉にはさらに西側へと移動し、終焉を迎えている（図付 9）。



図付9 居住域の時期変遷

このように、縄文時代前期から中期にかけての生産と居住様式の変化を单一の遺跡から分析できる遺跡は東北地方北部を広く見渡しても青森市三内丸山遺跡や七戸町二ツ森貝塚などごく少數の遺跡に限られており、田小屋屋貝塚は津軽地域を代表する拠点集落の一つに数えられる。また、縄文時代の貝塚はその多くが太平洋側に立地しており、日本海側に立地するものは少ない（樋泉 2007：図付10）。現在、国指定史跡の貝塚 68 遺跡のうち、日本海側に立地するものは田小屋屋貝塚を含めても、朝日貝塚（富山県）、上山田貝塚（富山県）、佐多・講武貝塚（島根県）のわずか4 遺跡にすぎない。本遺跡は、東北地方北部日本海側の地域における貝塚を伴う集落としては最大級の規模を有するもので、全国的にも希少な存在といえる。



図付10 列島の貝塚分布図
(樋泉 2007 を一部改変)

おわりに

以上の諸点を勘案すると、田小屋野貝塚は東北地方北部日本海側に立地する汽水性貝塚を保有する拠点集落として希少な存在であり、縄文海進の大きな環境変動のもと、人々が環境に適応し、定住した証拠を示す重要な遺跡である。我が国の歴史を語るうえで欠くことのできない遺跡であることから、平成 29 年 10 月には既指定地の西側 43,000 m²が新たに追加指定を受けた。

最後に今後の課題を示す。現状では指定地内に未調査区域が多く存在し、第 3 項にあげた集落の変遷観については遺構の配置に関する十分な情報が得られていない。そのため、今後も集落全体像の解明に向けた確認調査を計画的に実施していく必要がある。また、平成 29 年の史跡追加指定により、指定範囲が大幅に拡大したことを受け、今後は指定地全体に係る「保存活用計画」の策定を行う必要がある。その上で、隣接する亀ヶ岡遺跡とともに史跡整備の進め方が検討されていくことが望まれる。

引用・参考文献

- 青森県立郷土館 1995 『木造町田小屋野貝塚－岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書－』
青森県立郷土館調査報告第 35 集 考古-10
- 清野謙次 1969 『日本貝塚の研究』 岩波書店
- 小泉 格 1987 「完新世における対馬暖流の脈動」 『第四紀研究』 26-1
- 齊藤慶史 2012 「貝塚出土獸骨からみた円筒土器文化圏内における狩獵活動の地域性」 『博古研究』 44
- 佐藤傳藏 1896 「埴塙層中石器時代の遺物」 『東京人類学会雑誌』 12-127
- つがる市教育委員会 2016 『田小屋野貝塚 総括報告書』 つがる市遺跡調査報告書 9
- 樋泉岳二 2007 「貝塚－狩猟と漁撈」 『日本の考古学 上巻 一ドイツ展記念概説－』 学生社
- 中谷治宇二郎 1929 「東北地方石器時代遺跡調査豫報」 『人類学雑誌』 44-3
- 長谷川 豊 2006 「縄文時代の多雪地域におけるシカ獣・イノシシ獣－東北・北陸の資料集成とその基礎的検討－」 『往還する考古学 近江貝塚研究会論集 3』
- 福田友之 1995 「北日本におけるベンケイガイ交易－津軽海峡を渡った貝輪－」 『北海道考古学』 31
- 山内清男 1929 「関東北に於ける織維土器」 『史前学雑誌』 1-2

報告書抄録

ふりがな	しせきかめがおかせつきじだいいせきそうかつほうくしょ						
書名	史跡亀ヶ岡石器時代遺跡総括報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	つがる市遺跡調査報告書						
シリーズ番号	11						
編著者名	羽石智治・畠内和宏・木戸奈央子・小林和樹・佐野忠史						
編集機関	つがる市教育委員会						
所在地	〒038-3138 青森県つがる市木造若緑52 TEL 0173-49-1194 (社会教育文化課)						
発行年月日	西暦2019年(令和元年)6月28日						
ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	日本測地系 (Tokyo Datum)	調査期間	調査面積	調査原因	
かめがおかせい 亀ヶ岡遺跡	あおもりけいふるし 青森県つがる市 木造亀ヶ岡山93ほか	02209 209002	北緯	東経	2008.10.20~11.28	120m ²	国庫補助事業 (市内遺跡発 掘調査:開発 対応試掘)
			40° 52' 53"	140° 20' 27"	2009.9.1~12.11	100m ²	
					2010.10.20~11.29	60m ²	
					2013.7.16~12.6	220m ²	
					2014.6.9~6.19	214m ²	国庫補助事業 (市内遺跡発 掘調査:史跡 内および史跡 隣接地の内容 確認調査)
					2014.6.20~11.7	253m ²	
		2015.7.1~10.19	273m ²				
		2016.9.1~11.21	273m ²				
		2017.7.3~11.30	295m ²				
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
亀ヶ岡遺跡	集落跡	縄文前期～晩期	竪穴建物跡	3軒	円錐下層土器・石器	遺構・遺物の 中心年代は、 縄文時代晩期 前葉～中葉	
			壁穴状遺構	1基	円錐上層土器・石器		
			フラスコ状土坑	30基	中期後葉土器		
			土坑墓	110基	後期初頭～前葉土器・石器		
			土坑・ピット	228基	後期中葉～後葉土器・石器		
			理設土器	2基	後期前葉～後葉		
後土遺構	4基	土器・石器・土製品・石製品・ 骨角器・植物性遺物					
溝跡	4条						
縄文晩期末葉～ 弥生前期	土坑・ピット	6基	縄文晩期末葉～弥生前期				
	溝跡	5条	土器・土製品・石器・石製品				

要 約

1. 本報告書は、亀ヶ岡遺跡のこれまでの調査成果をまとめた総括報告書である。あわせて、過去の重要な関連文献を参考資料として再録した。
2. 亀ヶ岡遺跡は、精良土器や土偶が多数出土することで江戸時代より知られた遺跡である。その豊富な出土資料は基準資料として位置づけられ、明治以降に日本考古学の発達に重要な役割を果たした。
3. 亀ヶ岡遺跡は青森平島海岸を南北に延びる屏風山砂丘に位置し、遺跡範囲は砂丘地東端部の丘陵上とその南北の低湿地に及ぶ。縄文時代前期末葉～弥生時代前期にかけての複合遺跡であり、特に縄文時代晩期に遺構検出数と遺物量が増大することが判明した。
4. 南の低湿地は、明治以前多くの研究機関や研究者による発掘調査が実施され、大型充光器土偶（重文財）や津軽漆器、籠駄漆器、骨角器など亀ヶ岡遺跡を代表する多くの遺物が出土した。低湿地ではあわせて、古墳壇調査が繰り返し実施され、長期間に亘る遺跡周辺の環境変遷が明らかにされた。
5. 丘陵上の北側および南側緩傾斜部では、多数の重複する土坑墓群が検出され、縄文時代晚期前葉～中葉頃に墓域が広域に形成されたことが判明した。同時に堅土建物跡は遺跡北端部で1軒確認され、これまでの調査結果からは居住域が不明瞭である。
6. 丘陵上の土坑墓群と、低湿地の広域ににおける遺物包含層は、いずれも縄文時代晚期前葉～中葉頃に形成された。墓域の形成等の諸活動に伴い生じた廃土や遺物の廻覆行為、さらには祭祀行為が低湿地の遺物包含層の形成に大きく関わったと考えられた。
7. 亀ヶ岡遺跡では在地の緑色質實灰岩を用いた瓦製作が遂に実現された。玉類の一部は土坑墓からも出土し、埋葬時の副葬品と考えられた。
8. 花粉分析の結果、縄文時代初期に入るヒバ・コナラ・リ・トノキ等が増加することが判明し、遺跡周辺ではこの時期に植生の変化や有用植物の管理が進んだと考えられた。また、漆塗り土器や漆塗し布等の出土から、遺跡周辺で漆の採取・加工が行なわれたと考えられた。
9. 動物遺存体の分析の結果、縄文時代晩期にはシカ・イノシシ等の鹿類、アホウドリ・ガシラ類等の大形鳥類、アシカ蟹・オットセイ等の海獣が主要な狩猟対象であったと考えられた。開窓式離頬鍋や逆刺のついた鉈、出来島黒曜石が出土していることからも、遺跡から約500mほど離れた津軽半島西海岸付近までを含む活動領域が推察された。

史跡亀ヶ岡石器時代遺跡総括報告書

つがる市遺跡調査報告書11

発行年月日	2019(令和元年)6月28日
編集機関	青森県つがる市教育委員会
	〒038-3138 青森県つがる市木造若緑52
	TEL 0173-49-1194 (社会教育文化課) FAX 0173-49-1212 (代表)
印刷所	有限公司 アート印刷
	〒037-0011 青森県五所川原市大字金山字亀ヶ岡46-7
	TEL 0173-34-4487